



犠牲者の記録、聞き取り連携へ 阪神大震災、神戸大調査会 が他大学にも呼び掛け

2009.12.30 22:58

阪神大震災の犠牲者一人ひとりの記録を残そうと、神戸大学の学生有志で12年にわたって活動を続けてきた「震災犠牲者聞き語り調査会」が、遺族とつながりのあるNPO法人や関西学院大など他大学にも呼びかけ、共同で調査することがわかった。協力が得られる遺族が減ったため、調査会の活動をする学生らは「全員分の聞き取りが終わるまでやめない」と話している。

調査会は平成10年、室崎益輝教授（現関西学院大学教授）と塩崎賢明教授の呼びかけでスタート。統計や数字では伝えきれない被災の現実を後世に残すため、被災状況や住んでいた家の間取り、犠牲者の人柄や遺族の思いなどを記録してきた。

犠牲者全員の家族からの聞き取りを目指す、気の遠くなるような調査だが、始めたのは建築学専攻（当時）の大学院生や学生約20人。「人を守るべき建築物が倒壊し、多くの人々が亡くなった事実を建築にかかわる人間として知るべきだ」との思いから、毎年後輩に引き継ぎながら調査を続けてきた。

これまで361人の遺族から聞き取りを行ったが、遺族が引っ越して消息が分からなくなるなどして、ここ数年は協力者が年数人に減少。今年度は年明けに2人に聞き取りをするのみになった。このため近隣の関学大や、追悼行事を行っているNPOなどに協力を要請。前向きな返答が寄せられているという。

室崎教授は「歴史的な大仕事なので、多くの人々の力を借りて何とか調査をすすめたい」。また会の代表を務める三田博貴さん（23）は「他の大学の学生らとのつながりを生かし、連携を進めていきたい」と話している。